

四、主義主張、エッセイ、旅行記

生体解剖事件

百田 陽一



四月初旬に博多経由で全通した九州新幹線に乗って鹿児島入りし、ゴルフをツアープレーして横浜に戻りました。博多では、県庁そばの東公園を散歩、そのあと地下鉄で西へ向かい、大濠公園を散歩しました。東公園では亀山上皇と日蓮上人の銅像が博多湾を睨んで建っていました。亀山上皇の像には、「敵国降伏」の文字が刻まれていました。この銅像からほど近い宮崎宮にも「敵国降伏」の大きな額が掲げられています。ご承知の通り、博多は二度にわたって当時世界最大、最強の帝国だった「元」をいずれも台風という神風によって

ではありませんが、撃退したわけです。博多湾はアジアのいや世界史の現場、最前線だったことを改めて思い知らされました。

大濠公園では、ただの一軒しかないレストランで遅めの昼食を摂ったんですが、中年や若い女性たちでいっぱい、しばらく時間待ちさせられる盛況ぶりでした。私は福岡城(黒田城、舞鶴城)の外濠的なこの濠が福岡市で一番好きなところ。周囲二キロで格好のジョギングコースとしても親しまれ、真ん中に中の島が走り、濠では、ボートを漕いで楽しむ市民の姿が絶えません。いいロケーションだけあって米国の領事館が以前からあり、NHKも天神から引越してきてだいぶたちます。

ということ、今回は出身地福岡、博多への思いを語ります。朝日新聞記者時代、西部本社発行の夕刊に「偏西風」というコラムが

あり、各支局長（現在は総局長）や本社デスクが輪番で執筆を担当していました。宮崎支局長時代に執筆した偏西風の中からふるさと関連の二編を紹介します。

★★ 生体解剖事件

福岡高裁の裏に、コンクリートの四角い建物がある。こどものころ近くに住んでいてその不気味な存在が気になって仕方なかった。上坂冬子の「生体解剖」を読んで、それが旧軍の西部軍司令部「防空作戦室」で、そこにいた大佐が、米軍の捕獲搭乗員を九大に引き渡し、いわゆる九大医学部の生体解剖事件が起きたことを知った。

三月二十七日、鳥巢太郎さんが八十五歳で亡くなった。各紙の死亡記事に生体解剖事件に連座、とあった。死刑判決を減刑され、巣鴨拘置所を出たあと、福岡市の大名で開業さ

れていた外科医院に何度かお世話になった記憶がある。もちろん、こどもの時分なので、「事件」については知らなかった。「生体解剖」のあとがきに当時、宮崎医科大学の教授で、現在、学長の木下和夫氏が上坂さんに手紙を出していたことが紹介されていた。

木下さんが、一九五六（昭和三十一年）に九大の医局に入局。事件の主要な人物である第一外科のI教授（故人）の顕彰碑を建てる話が20年ほど前に持ち上がったとき、「医師としての良心から許せない」と反対した一人だ。

「鳥巢さんはすぐに、生体解剖から手を引かれたが、事件にかかわったこと、教授を引き止められなかった、という自責の念で残りの人生は懺悔（ざんげ）の日々だった、と思う。私自身、本人から事件について聞きたいという衝動にかられたこともあったが、でき

なかった。死亡記事を読んだ時、生体解剖事件も歴史になった、という感慨を覚えた」と木下学長はいう。

★ ★ 平和台球場

平和台球場で、もうプロ野球を観戦できない、というニュースは、球場そばで小学5年まで過ごし、球場を含む舞鶴場一帯が「ウサギ追いし、ふるさと」である私にとって感慨深い。

球場ができる前は、一面の野原で、オートバイレースが開かれたりしていた。球場建設が始まると、トロッコに乗って遊んでは、作業員に追掛けられ、必死で逃げた思い出がある。

球場オープン間もない巨人VS阪神戦だった、と思う。詰めかけたファンが折り重なって死者が出る騒ぎになった。娯楽の少ない

時代。すごい人気だった。試合がある日はたいがい球場に足を運んだ。外野の石垣をよじ登り、鉄条網をかくぐくぐつてもぐりこむことが多かった気がする。

昭和27年7月16日の西鉄VS毎日戦、いわゆる平和台事件も目撃した。毎日の選手がわざとショートゴロなどを取らず、日没ノーゲームにしたのはこどもの目にもわかった。大人たちが次々とフェンスを乗り越え、グラウンドになだれ込んだ。そのあとを追い、内野を走り回った。

球場建設の際、黄土色の布目瓦などがいっぱい出土、ほったらかされていた。舞鶴城のものと思っていたが、今思えば、場所的には、鴻臚館の出土品だったのかも知れない。

アマチュアの球場として出直すそうだが、平和台周辺が、これからも福博の市民の「オアシス」であり続けて欲しい。